

更年期不定愁訴の漢方療法

北里研究所・東洋医学総合研究所
診療部門長
石野 尚吾

漢方とは

漢方とは、日本における中国系伝統医学の総称である。江戸時代にヨーロッパ系医学が伝来した際に、在来の日本の医学を「漢方」と呼んだことに始まる。漢方の起源は明以前の中国医学であり、現代の中国医学と同根であり、使用する薬物、用語などに共通点が多くみられる。しかし両者は別物である。

漢方は江戸時代に日本独自の発展をし、明治以後はヨーロッパ系医学の影響も加わりその結果日本の伝統医学として「漢方」が確立された。

基本的には植物、一部の動物、鉱物を生薬として用い、それらを組合せて使用するものが漢方薬である。

漢方医学の特徴

人体を一個の有機体とみなし診断し、治療を行う。すなわち身体と精神（心）は不可分であり、一体である「心身一如」という中国・日本の伝統的な医学思想のもとに、病人各個人の特徴、個人差を尊重して心身全体の調和をはかる、という治療体系をもっている。

漢方での病態のとらえ方

漢方治療を行うには、患者の現している状態を経験的な病態分類である陰陽（表1）、虚实（表2）、と仮想的病因論として気・血・水（表3、4）の異常に分類し、漢方薬特有の使用基準である証を決定し処方を選定する。

すなわち全身状態は陰陽（生命反応の強弱）と虚实（体質の強弱）で診断し、身体的な所見および症状により気・血・水の異常を把握し以上を総合して処方を決定する。

証とは患者を診察し治療する場合に体力があるかないかなど、その人の基本的な類型（証・虚証、実証、陰証、陽証）と、ある症状、疾患に有効な処方が〇〇湯の場合には〇〇湯証となる。すなわち証とはその患者にどの処方の薬剤が有効な病人であるかを診断して分類した病態の表現方法である。それには基本的類型と病態の類型とがある。

（表1）陰陽の概念

	身体的な状態	臨床的特徴
陰	新陳代謝の低下した状態。 疾患に対する反応は低下している。 生体機能全般の低下。	顔が青白い。冷え症。あまり発汗しない。 動作が緩慢で元気がない。炎症反応が弱。
陽	新陳代謝の亢進した状態。 疾患に対する反応は低下している。	顔が青白い。暑がり。汗かきで、赤い顔をしている。活動的で陽気。 炎症反応が強く症状が現れやすい。

更年期不定愁訴の漢方的なとらえ方

1. 女性の生殖機能を中心にした年齢的变化

中国の最も古い医学書『黄帝内経素問』には、女性の生殖作用の変化が簡明に述べられている。それは7の倍数でその節目をとらえている。7歳でそろそろ内分泌系の活動が開始し、14歳で月経が起こる、21～28歳で女性として最盛期となり、49歳で閉経すると説明している。

2. 血の道症

漢方には更年期という用語はない。我が国では約250年前から、女性の多くの病気のことを「血の道」と呼んでいた。『養生弁』という江戸時代の本には「血の道とは日本の詞にして漢土になき病名なり、経行くの血の道筋の変より病となり、千変万化に悩ますなり」とある。この意味の範囲は広く、月経、妊娠、分娩、更年期などに伴い起こるもので、症状は主に自覚的、精神神経的であり機質的变化があまり認められないものが特長である。九嶋は「血の道」を「婦人にみられる更年期障害類似の自律神経症候群」と定義した。

更年期不定愁訴の漢方治療

漢方治療は全体治療といわれている。身体の一部が表す局所的な変化に対しても全身的な所見としてとらえて治療を行う。更年期不定愁訴のように一度に多彩なまた西洋医学的には一見脈絡のない症状も漢方的にみれば統一的な概念をもって把握し治療が可能となり、したがって比較的少ない処方に対応できる。

更年期不定愁訴の頻用処方

更年期不定愁訴によく用いられる処方はいちじく散、加味逍遙散、女神散、桂枝茯苓丸、柴胡加竜骨牡蠣湯などで、これらを「証」により選用する。以下頻用処方について述べる。

(表2) 虚実の概念

虚	体力が弱く闘病反応の低下した状態。体格は貧弱で、筋肉は弾力性に乏しい、皮下脂肪は薄くやせ形、消化器機能も弱く、疲れやすいなど。虚弱体質。
実	体格はガッチリし闘病反応を強く現す。筋肉は弾力的で、皮下脂肪は厚く緊張している。消化器機能も強く疲れにくいなど。体質が強い。

(表3) 気血水の概念

気	働きが合って形のないもの、全身を循環しているとされ、現代医学用語では説明しにくく、免疫系、内分泌系、精神神経系など生体情報系の機能を暗示していると想像される。病気を治そうとする気力などと理解される。
血	血については現在の血液とほぼ同じと考えられ、その機能を含めた概念で、血の異常状態に瘀血(滞っている血流)と血虚があり治療対象となる。
水	血液以外の体液とその機能を含めた概念。

(表4) 気血水の臨床症状

気の異常状態	症状・所見
気の上衝	冷えのぼせ、頭痛、顔面紅潮、めまい、動悸
気の滞り (気鬱)	神経症様症状、抑うつ気分、不安感、咽になにかつまった感、ヒステリー様
気虚	気力がない、易疲労感

血の異常状態	症状・所見
瘀血	口乾、煩熱、皮膚粘膜の暗紫色斑点や青すじ、舌縁や口唇の暗紫色化、クモ状血管腫、異色便(黒色便など)、粘膜の出血斑、下腹部の腹満感、膨満、圧痛、抵抗、性器出血、月経異常など
血虚	貧血様症状

水の異常状態	症状・所見
水毒	頭痛、耳鳴、眩暈、口渴、嘔吐、下痢、クシャミ、鼻汁、喘鳴、喀痰、動悸、心下部振水音、腹中雷鳴、尿利減少、多尿、浮腫、多汗、関節痛など

(Medical Practice '88. 治療薬ガイド)

〔Ⅰ．全身症状(倦怠感など)に用いられる処方〕

1)十全大補湯(じゅうぜんたいほうとう) 人参, 黄耆, 朮, 当帰, 茯苓, 地黄, 川芎, 芍薬, 桂枝, 甘草.

虚弱体質, 全身衰弱, 全身倦怠, 食欲不振などがある.

2)補中益気湯(ほちゅうえつきとう) 黄耆, 人参, 朮, 当帰, 陳皮, 大棗, 甘草, 柴胡, 乾姜, 升麻.

体力弱く話し方や, 目つきに活気がない, 食欲不振, 動悸, 不安感などがある.

3)八味地黄丸(はちみじおうがん) 地黄, 山茱萸, 山藥, 沢瀉, 茯苓, 牡丹皮, 桂枝, 附子. 体力体質やや弱い人, 中年以上の主に全身倦怠特に腰から下にかけて力が抜けるような感じがし, 膝がガクガクして転びやすい, 陰萎, 排尿異常などがある.

4)清暑益気湯(せいしょえつきとう) 人参, 白朮, 麦門冬, 黄耆, 五味子, 陳皮, 黄柏. 一般的に夏負けに用いられるがそれに限らず疲労倦怠, 熱感, 寝汗などに用いる.

5)小柴胡湯(しょうさいこうとう) 柴胡, 半夏, 生姜, 黄芩, 大棗, 人参, 甘草.

体力中程度の人, 疲労感, 食欲不振があり, 季肋部の重苦しい感じ.

〔Ⅱ．精神神経症状に用いられる処方〕

1)桂枝加竜骨牡蠣湯(けいしかりゅうこうつぱれいとう) 桂枝, 芍薬, 大棗, 生姜, 甘草, 竜骨, 牡蠣.

体力虚弱な人で疲れやすく, のぼせやすい, 臍部は動悸があり, 下腹部は腹直筋が突っばっている.

2)加味逍遙散(かみしょうようさん) 当帰, 芍薬, 白朮, 茯苓, 柴胡, 甘草, 牡丹皮, 山梔子, 生姜, 薄荷.

体質やや弱くイライラして不安感がつよく, 頭痛, めまい, 下肢の冷えなどがある.

3)抑肝散(よくかんさん) 当帰, 釣藤, 川芎, 朮, 茯苓, 柴胡, 甘草.

やや虚弱な体質の人で気分がイライラして怒りっぽく, 興奮してよく眠れないなどに用いる.

4)女神散(によしんさん) 当帰, 川芎, 白朮, 香附子, 桂枝, 人参, 黄芩, びんろう, 黄連, 木香, 甘草, 丁香, 大黄.

体力体質はやや強く, のぼせ, めまいがあり, とくに産後の精神安定剂的な作用がある.

5)柴胡加竜骨牡蠣湯(さいこかりゅうこうつぱれいとう) 柴胡, 半夏, 桂枝, 茯苓, 黄芩, 大棗, 生姜, 人参, 竜骨, 牡蠣, 大黄.

体力充実していて臍部に動悸を訴える. 胸脇苦満(季肋下部に圧痛抵抗感)があり, 不眠, 便秘傾向である.

〔Ⅲ．特異的な症状に用いられる処方〕

1. 冷え, のぼせ

1)当帰芍薬散(とうきしゃくやくさん) 当帰, 川芎, 芍薬, 茯苓, 朮, 沢瀉.

体質は虚弱, 冷え, 貧血傾向があり, 腹壁は軟弱, 体型は中肉中背, とくに冷えると諸症状が悪化するものに用いる.

2)当帰四逆加呉茱萸生姜湯(とうきしぎやくかごしゅゆしょうきょうとう) 当帰, 桂枝, 芍薬, 木通, 細辛, 甘草, 大棗, 呉茱萸, 生姜.

体質やや弱い, 寒冷に敏感で手足の冷え強くしもやけになりやすい.

3)苓姜朮甘湯(りょうきょうじゅつかんとう) 茯苓, 乾姜, 白朮, 甘草.

体力中ぐらいからやや弱い, 腰に氷を押し付けたように冷える.

4)黄連解毒湯(おうれんげどくとう) 黄連, 黄柏, 黄芩, 梔子.

体力があり、のぼせがみで顔面紅潮している。のぼせが主で、めまい、頭重感がある。冷えには用いない。

5) 桂枝茯苓丸（けいしぶくりょうがん）桂枝、茯苓、牡丹皮、桃仁、芍薬。

比較的体力があり下腹部に圧痛、抵抗を認める。のぼせて赤ら顔の場合が多い。

6) 桃核承気湯（とうかくじょうきとう）桃仁、桂枝、芒硝、大黄、甘草。

体質強く桂枝茯苓丸を用いる場合よりも症状が激しく、便秘傾向の強い、腹部触診上に小腹急結（指先で左下腹部の皮膚の表面を軽く擦過すると、腹直筋の反射的な強い収縮がおこり、強い痛みを感じ膝を屈める）がある。

2. めまい

1) 真武湯（しんぶとう）茯苓、芍薬、生姜、朮、附子。

顔色は青白く、倦怠感が強い、腹部は軟弱で脈は沈んで触れにくい。手足も冷えがとくに強く時に下痢することもある。

2) 当帰芍薬散（前出）

3) 半夏白朮天麻湯（はんげんびやくじゅつてんまとう）半夏、白朮、陳皮、茯苓、蒼朮、麦芽、天麻、神糊、黄耆、人参、沢瀉、黄柏、生姜、乾姜。

体質弱く胃腸虚弱な者のめまい、頭痛に用いる。食後に体がだるく眠気を催してくる。

4) 苓桂朮甘湯（りょうけいじゅつかんとう）茯苓、桂枝、五味子、甘草。

のぼせ、めまい、身体動揺感、心悸亢進などがあり、めまいの第一選択薬がある。

5) 女神散（前出）

3. 消化器症状

1) 桂枝加芍薬湯（けいしかしゃくやくとう）桂枝、生姜、大棗、甘草、芍薬。

下痢と便秘が交互にくる過敏性腸症候群にはまず本方を投与してみる。

2) 小建中湯（しょうけんちゅうとう）桂枝、生姜、大棗、芍薬、甘草、膠飴。

虚弱体質で疲れやすく、突然腹痛を訴える。

3) 人参湯（にんじんとう）人参、甘草、朮、乾姜。

下痢型の例に用いる。桂枝加芍薬湯よりも体力のない人でお腹の冷える人。

4) 真武湯（しんぶとう）茯苓、芍薬、生姜、朮、附子。

手足が冷えやすく体力気力に乏しく下痢型の人に用いる。早朝の水様性の下痢、軽い腹痛がある。

5) 半夏瀉心湯（はんげしゃしんとう）半夏、黄芩、乾姜、人参、甘草、大棗、黄連。

中間証ないしやや実証タイプ、心窩部がつかえる感じがして食後のもたれ感がある。

このほか更年期に好発する疾患たとえば更年期角皮症、腹圧性尿失禁、腰痛、高血圧症、萎縮性膀胱炎などがあり、これらを広義の更年期不定愁訴と考える人もいる。今回は紙面の関係で割愛した。

西洋医薬との使い分け

本症は漢方治療が第一選択である、しかし治療開始の初期で症状が激しい場合には西洋医薬との併用は可能であり、漢方薬の効果の発現により西洋医薬を徐々に減量できる。

おわりに

漢方療法は現代医学的な病名のない時代の治療法である。今回はできるだけ現代医学的な病名、診断、分類に従って解説を試みた。うまく説明可能な例もあり、またうまくいかない場合もある、現代医学的な範疇に入らない場合には、古典的、伝統的な方法論に基づいて行くと、治療がうまくいく場合が多い。